日本文学全集
55

石原慎太郎・深沢七郎
高橋和巳

行為と死・太陽の季節・処刑の部屋・待伏せ
笛吹川・楢山節考・べえべえぶし・おくま嘘歌
堕落・散華・あの花この花・日々の葬祭・飛翔

河出書房

石原慎太郎・深沢七郎・高橋和巳

カラー版日本文学全集　55

1971©

昭和四十六年　二月二十日　初版印刷
昭和四十六年　二月二十七日　初版発行

定価　七五〇円

著者　石原慎太郎　深沢七郎　高橋和巳
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331155-0961

目次

石原慎太郎
行為と死……五
太陽の季節……六九
処刑の部屋……九三
待伏せ……一八
深沢七郎
笛吹川……一三一
楢山節考……二一三
べえべえぶし……二三六
おくま嘘歌……二四三

高橋和巳

堕落……二五一
散華……三一二
あの花この花……三四一
日々の葬祭……三五三
飛翔……三八八

注釈　小久保実　三七二
年譜　三八二
解説　磯田光一　三九三
巻頭写真　榎本良介
色刷挿画　行為と死　太陽の季節　島田章三
笛吹川　柄山節考　芹沢銈介
堕落　散華　高松次郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

石原慎太郎

行為と死

スエズ*

遠く背後で燃えているマナハ地区の建物の火を除けば、辺りに見える明りはなかった。

この町に戦闘が開始されて僅か数日ではあったが、革命後、子供までの市民がどんな訓練を重ねて来たとは言え、最も新しい兵器で重武装した敵軍が、孤立したこの町を陸海空の三方から押し包んでの攻撃の前には、すでに闘いの結着は眼に見えていた。

それでも全面降伏を呼びかける敵軍に従わず、未だにゲリラに姿を変えた戦闘が方々で行われている。

事実、首都カイロ*からとどいた通達は、全国民最後の一人まで銃を取って侵略と闘え、だった。

防戦した軍隊が潰滅して姿を消した後、なお執拗に市民の抵抗はつづいている。業を煮やした相手の攻撃は段々に野蛮となり、戦闘員、市民の見境いない攻撃がくり返され、最も執拗な抵抗をつづけるマナハ地区アバティストリートの住民に向って、抵抗を止めなければ人質の市民五人ずつを毎日犠牲として銃殺するという通告が、昨日英軍の手で行われ、実際にその処刑が行われていた。

しかし、今も見る通り、マナハの街に銃火は絶えることがなかった。マナハに限らず、海岸線から内陸へ、カイロを目ざして侵略しようとする英仏軍を食いとめるために、ポートサイド市*の内外に、大小、さまざまな形で戦闘が続いている。

ポートサイドの中心部を占拠しながらも、それ以後の英仏軍の侵略の速度は、敵をその地に足止めしようとする市民の必死の反撃で、著しく落ちていた。

街路に灯りはなくとも、眼をこらせば澄んだ夜空の星明りで道筋をちがえることはなかった。

車は爆撃で崩れた家の壁で両側ともフェンダーがつぶれ、ライトは役にたたない。キイを入れ、エンジンが始動するのが不思議なくらいだった。

エウゲニアヴェニュを左へ折れ、シスメイルストリートに出る。一ブロックいった角にあったセムフッドのキャフェは爆撃に壊されすでに面影もなかった。

幅広い通りには全く人影がない。この辺りは英仏軍に完全占拠されている地域だが、彼らの姿もない。夜間のゲリラを怖れてだろうか。こうしてただ一人、夜間、車を駆っている皆川にも、英仏軍の兵士と同じ危険がないとは言えない。

彼が今向おうとしている仕事に、彼をおもむかしめた仲間たちからこの地域の市民兵に連絡は取られている筈ではあったが、どんな手違いがあるかも知れぬ。

まして、市街を封鎖した英仏軍が彼を見咎めた時、どんな手を加えるかは全くわからなかった。検問なしの、即座の銃撃ということもあり得た。

後の窓から、手製の日の丸がたらしてはある。しかしそれとても夜目に遠くから確かめられる筈はない。

周りにあるかも知れぬ眼から隠れるというよりは逆に、こわれて使えぬクラクションの代りに時折クラッチを切りエンジンを空にふかして鳴動させながら、皆川はゆっくり車を走らせつづけた。

車を乗り捨てるところまで一マイルにも満たぬ距離だが、速度を落した車のなかで、いつ浴びせられるかも知らぬ銃火を怖れつつ進む行程は、千倍の遅さにも感じられた。

レセップス*の銅像のあったレセップス通りとの交叉点にかかった時、間近前方に銃声がし、眼の前の舗道に青い光をたてて銃弾が跳ねた。

停車した車に、

「誰か。どこへいくのか」

誰何(すいか)する英兵の声が響いた。

闇をすかして見る眼に、数十米先のバリケードに動く人影が見える。

「家へ帰る。俺は外国人だ。通してくれ」

皆川は英語で叫び返した。

徐行し、彼らの眼前で停止した車を囲むように四五人の兵隊が立った。皆川の言った、外国人という言葉を私語し合う声が聞える。

「外国人とは何人か」

声が聞いた。

「日本人だ。窓の国旗を見てくれ」

皆川の名乗った国籍が意外だったか、周りでざわめく気配があった。

小さな明りが一瞬だけ彼の顔を照し出して消えた。

「外交官か」

「違う。商社のカイロ駐在員だ。ポートサイドに入った貨物船に用事があって来ているうち、戦争になった」

説明に嘘はなかった。

「何で今頃」

とはいえ、夜ではあったが未だ十時前だ。陽が落ちてきて、ようやく夜の闇が地上を覆いつくした時刻だった。

「当地にいる友人が大怪我をし病院に入れられた。尤も、その男は病院に入った後、君らが病院に加えた攻撃で更に大怪我をしたそうだ。彼を見舞いにいっていて遅くなった。一時間前、彼は死んだがね」

誰かが何か言い、言われた人間が離れると間を置き他の誰かを連れて戻った。

士官らしい男が顔を覗かせた。男に向って皆川は、彼らに言ったと同じことを話した。

「パスポートはあるか」

皆川がとり出して示したパスポートを受けとると、手元に隠した明りで確かめ、その灯を向け皆川の顔を照す。

士官が読み上げる名を、従兵の誰かが手元に記している。

「夜間の通行は禁じている筈だ」

「いや、我々外国人は何の通達も受けていない。何が何やらわからぬままだ。一体、これは正式の戦争なのか、それとも——」

「戦争だ」

遮るように言った。

「戦争としても我々には訳がわからない」

士官は何も答えず、代りに行く先を質(ただ)した。

この道の先を右へ折れた埠頭(ふとう)の先近くにある業者のクラブの番地を答えた。

「トランクを開けろ」

兵士たちが開けられたトランクの中を捜す間、士官は彼の座席の辺りを明りで照し出した。

手にしたパスポートを返そうとしながら、士官はもう一度それを眺め直す。

彼らにすれば、近東とはいえこの町の戦場で思いがけず見かけた日本人の意味を判じかね、その扱いに戸惑うのがよくわかった。

「カイロにはいつ帰れるだろうか」

答える代りに士官はパスポートをさし出した。

「通れ。但し、今後夜間の通行は一切禁止だ」

皆川は頷いた。なお胡乱気に見守る彼らの視線を感じながらギアを入れた。

「戦争はいつ終るのかね」

「知らんな。あの黒いうるさい蠅どもに訊いてくれ。一体いつ止めるつもりだと」

吐き出すように士官は言った。

〝蠅か――〟

彼は思った。思いながら彼の連想は何故かすぐに、このボートサイドに限らず、全エジプトの町中に張られた彼らの指導者の肖像を想い起させた。

写真だけではなく、実際に眼にしたナセル*の姿が重なって眼に浮んだ。六尺を越す大柄な体軀。体だけではなく、彼の体の部分はすべて巨きく見えた。巨きな鼻、巨きな耳、張り出した顎、そして、半年前、来埃した社長を建設相との会談に案内した折、役所の廊下で若い建設相に紹介され握り合った彼の厚く巨きな掌。

その当時、そして今は更に、彼が革命後の国家の指導者としてかかえているものの大きさについて概略は知りながら、相手へのしかかり包むようにして握手して来る彼の手に触れた時、皆川はこの男が並外れて巨きなその体の上にかかえている、並外れて大きなものについて初めて感じたような気がしたのだ。

侵略した英軍の将校が吐き出すように言った言葉を、車を駆りながら皆川は反芻していた。

あの士官が、あの男と、自分がしたと同じように向い合った時も、彼は同じようにあの男のことを蠅と呼ぶだろうか、と思った。

しかし皆川がその手の巨きく熱い感触を知っているあの男を持ち出す前に、士官が吐いた言葉はあるところで当っているとも言えた。皆川自身が、同じような感慨で彼らを眺めたことはなかったか。

ギザの巨大なモニュメント*の周りで観光の客たちにまつわり群がる黒く卑小な人間たち、オールドカイロの下町の薄汚れたパジャマに似たガビラで巣食う下層の市民たち、それらを培う熱気と臭気の中に、彼らは確かに蠅とも見られた。

いや、四年前の無血革命後、市中で度々持たれるナセル始め閣僚たちの演説集会に群がり熱狂し、市中を行進する市民たちを、皆川は時折、あの英軍の士官が吐いた言葉と同じような感慨で眺めたことがある。

それは、彼の事務所のあるスリマンパシャの、完備されたオフィス街や、美しく整った高級要人の住むザマリックやガーデン辺りの高級住宅地で感じるカイロ、エジプト、エジプト人たちとは全く違って、見守る眼にもっと生々しい何かをつきつけた。

そしてそれらが、その蠅たちが、あのナセルがくり返して言う、真実のエジプトであるに違いない。

士官の吐いた言葉は、この今になって皆川に忘れていたものを思い出させた。真実のエジプト、或いはエジプト人に対して自分が抱いた初めの感慨が、表現の形としては決して違っていないのを彼は感じる。

危険な暗黒の市街をたった一人車を駆り、検問をようやく抜け、その先に更に危うい目的に向おうとしながら、皆川は今あの士官の言葉を契機に胸の内に蘇ったものと、今こうしてこの仕事に向いつつある自分との組み合わせを奇態な感慨で考え直していた。

彼らは確かに蠅であった。

この数日の戦闘に彼らは蠅のように容易に、蠅のようにきりなく殺されていった。そして、彼らは今なお、蠅のように執拗に闘いつづけていた。

その執拗さは侵略者の英仏軍の兵士にとって、あのスフィンクスやピラミッド*の足場で、旅客にまつわりついて駱駝をすすめ、スヴェニール*を売りつけ、果ては、ただ金を無心するしつこさと同じものだったかも知れない。

そしてそのいずれもが、ナセルの言うが如くに、過去数百年の圧制と貧困から生れたものであるのかも――。

しかし、その詮索は、今皆川にとって一切不要なものに感じられた。

徐行する車のフロントグラスに額を押しつけ、折れて曲った街角から更に行く先を確かめながら、彼はそうしたことがらについて、今自分の内に、この数日以前の過去と比べて、決定的に異なる、何かが在ることを知っていた。

それはたった一つ、実に簡単なことがらによってもたらされたのだ。

皆川は彼自身、今、あの士官が言った、蠅であった。少くとも、彼を今、ここへ指し向けた仲間はそう言ったのだ。

果してそうであるかどうか、そのことは皆川にとってどうでもいいことに思われる。

彼にわかることは、突然スエズへの侵略が始ってこの数日、彼は彼らと一緒にいた、ということだけだ。そしてそのことが今この仕事を選ばせ彼をおもむかせたのだ。

彼はそれを今夜選んだのではない。すでに彼は選んでいた。

三日前、バーケットディグディの飛行場に英軍パラシュート部隊の最初の降下があった時、射ち殺された友人イスマイルの銃を彼が取り上げ空に向って放った瞬間から、彼は選んだ自分を覚っていたのだ。

スエズの侵略は、彼には関りない事件であった。皆川と同じ国籍を持つ人間たちの中には、たとえ今このスエズの地にいなくとも、彼らが抱いているある精神、ある観念からすれば、彼らはこの事件の内に敵を決め味方を決することが出来たろう。この事件について、侵略側の英仏が、或いはそれを防いでいるエジプトが、宣言した意味を認めることが出来たろう。

しかし少くとも皆川にとっては、この戦闘は、たとえそれが片側の謀略であり、侵略であろうとも、全く関りないことがらの筈だった。

一九五六年、十月二十九日、イスラエル軍がシナイ半島*で国境を越え、その翌日、イスラエル空軍の爆撃が始ってからも、彼はカイロへ引き返し、或いは更に安全な外地へ、この戦争をかわして逃れることが出来たのだ。

しかし彼はポートサイドへ踏みとどまった。それも決して、彼がその時、この事件に関しての自分を選んだからではない。スエズの空襲が始ったその時も、彼はまだ傍観者でしかなかった。彼は一刻も早くカイロへ、そしてそこが危険ならば外国へも移ろうと思っていた。

が、彼は一人の人間を説得しカイロへ連れ戻すためにその時機を遅らせたのだ。

そしてその人間、ポートサイドを故郷としこの町に家族を持つファリダは、彼の誘いに肯んずることがなかった。

皆川は侵攻がこれほどまでの戦闘になるとは予想してはいなかった。それにしても当然起るだろう危険は充分予知していた。それでもなお彼が、とうとうポートサイドが封鎖されるまでこの地にとどまったのは、ただファリダのためでしかなかった。

彼を、この激しい戦闘の危険の中に晒させたものは、結局、愛であったと言うのか。

危険の最中に、彼はその時になって初めて、自らのために愛という言葉を持ち出して考えた。多分、今までの彼の人生の中での初めての体験として。

そして自ら持ち出したその言葉に彼はまごついていた。

勿論、それ以前に、皆川は彼女に対する自分の気持を愛という言葉で伝えはした。しかし、それはなんと言おう、彼ら二人に限らぬ人間の社会一般の、或る特殊の場合のいわば常識的な方法として使われただけだった筈だ。

そのことを皆川は今になって知るのだ。

彼女に関りある己の行為を、己の生命とのかけがえにおいてとった

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ことを知った時、彼はその行為の最も根源的な衝動について自問してみた。

たとえ、カイロでの今までの二人の間をそう説明することは出来ても、今それをただ彼女への執着、と呼ぶことは許せぬと思った。

〃――それならば、俺は本当に愛しているのだ〃

自らを説くように彼は思った。

そう説くことで、彼は自らの内に知らなかった自身を、覆われたその皮を剝ぎ、初めて己の眼の前に晒したのだ。しかしながら、それは彼にとって信じ難いことにも思われた。

今、自らへそう説いて知らすことが、今はもう新しく何をも生みはしない。その余地すらないというほどのこの極限状況の中で、そう知らされながら彼はもう一度そのことを自らの手で自らへどうにかして現実に証したいと思った。

車はシスメイルストリートを脱けきり、シャリヤアズミにかかる。整然と並んだ街の区画は終り、カイロからの鉄道の終着駅を過ぎると、運河港湾関係の事務所、倉庫、関係工場の並んだ区域に入った。高い壁に等間隔に開いたゲイトをくぐると、左手はすぐに港のスリップと海だった。

アルセナル繫船渠を過ぎ、三十番ゲイトの前で車を止めた。

ゲイトの格子は片側が壊れ開け放されたままになっている。塀に寄せて車を止めて下りると、皆川はゲイトを脱けて埠頭へ入った。

運河地区の海軍司令部のあったこの埠頭は、重なる空襲で完全に破壊され、星明りに見渡した辺りには人の気配は感じられない。たてこんだ高い建物が潰滅し、その残骸だけが残る広い埠頭は夜目にも茫々たる廃墟だった。

それでもなお、足音を忍ばせて石畳の上を歩いた。保税倉庫と税関の焼け跡の間にどうにか車の通りそうな余地がある。

運ばなくてはならぬ荷物の重さからしても出来る限り車を使いたかった。

しかし、埠頭の先端まで車を運べたとしても、そこから目的地である埠頭の裏側になるシリフベイズインを横切り隣のアバスヒルミベイズインとの間に出た、埠頭の先端に舫われた汽船まで、水上約千米の行程がある。

出来ることなら隣の埠頭まで車でいきつきたいが、埠頭の根元にある、発電所への鉄道分岐点に英軍の分司所が出来ている。そこが占領し送電を中止した発電所への司令の中継地だった。

たとえそこを通過出来ても、その近くから埠頭へ潜入して作業するには、発見される危険が多くあった。それに運河港湾の最も狭窄した目的地は、両岸の陸地から監視の眼も厳しかろうし、必然、目的地への到達は途中から水の上をたどらなくてはならぬ。

ゲイトまで引き返し、止めていた車を埠頭に乗り入れた。先端から五十米近く手前で、崩れた海軍倉庫の残骸に邪魔され車を止めた。

そこまで来ると水の上を伝う夜風に乗って、潮の香がする。見上げた夜空に、落ちかかるように間近く、銀河が光った。

確かめるように見つめる前方の水のはるか彼方、対岸のポートファウドの市街に、ぼんやりと火の手が上って見える。砲声は聞こえなかった。

煙草が吸いたく、思わずポケットを探りかけ気づいて止めた。

皆川はこれから行おうとしていることの意味をよく知っている。そしてその危険さについても。

ポートサイドが陥落した後、侵略軍は当然首都カイロを目指す。その最も容易で手っ取り早い方法は、運河を下り、途中のイスマリヤ市*を落して東からカイロを攻めることだ。

彼我の誰しもがそれを予想していた。そして守る方はまず、英仏軍が兵力を最も容易に動かすことの出来る汽船を使ってイスマリヤに到るのを食い止めなくてはならぬ。方法は即ち、運河の閉塞である。

殆ど潰滅したポートサイドの防衛軍に出来ることはただ一つ、運河

の港湾に止った船を沈めて水路を塞ぐことだ。

しかし今となっては、そのために船を動かして運ぶことは不可能だった。残るのは、港湾中に停泊しているいずれかの船舶をその場で沈める方法しかない。

しかし、水路の幅広い部分に船を沈めても役にはたたぬ。が、運河の奥手の狭水道部分には停泊している船は無かった。

他を見渡し、守備側が選んだのは、シリフとアバスヒルミベイズインの間の埠頭の先端に舫われたままでいるエジプト海軍の輸送船ゾエラ号だった。

輸送船が止っている地点は、対岸のポートファウドの埋立二号島との間隔が港湾中最も狭い。四千頓のゾエラ号を、何らかの方法で舫いを切り、岸を少しでも離して沈めれば、他の大型艦船の運河進行は完全に阻むことが出来た。

守備軍が考えることを、当然、相手も考えた。前日、前々日の二度、夜間に行われた陸上からの試みは、近辺を固めた英軍の銃火で完全に鎮圧撃退されていた。

残された方法は水の上からしかない。それとて、相手が水の上にもどれほどの警備を敷いているかはわからなかった。

そしてこの二日間の市街戦で英仏軍の制圧は一層拡がって徹底し、目的への接近すら困難となっている。水の上からとはいえ、極端に離れたところから近づいていく訳にはいかない。地上には市民兵のゲリラの跳梁はあっても、水と空は完全に相手側に制圧されてい、港湾を過ぎるエジプト側のいかなる舟艇も、発見と同時即座に、港湾中に停泊した英仏軍の艦船の砲撃で沈没させられた。

残された水路を伝う方法も、人間が泳いでいくしかないのだ。そして、その限界点まで到達するのに最も可能性ある人間として、皆川が選ばれた。いや、彼自身が申し出たのだ。

先刻、車を下りて見た時には気づかなかったが、海の上にいる砲艦の探照燈がゆっくりと辺りを照し出した。強烈な明りが低い仰角で、じりじりした速度で埠頭を照して過ぎる。

建物の残骸に遮られて直接照し出されはしないが、夾雑物の反射で残骸の谷間の辺りも明るくなる。

皆川は思わず身構えるように辺りを見廻した。

移っていく光に従って、崩れ落ち焼け朽ちた建物の残骸が異形な影を作って次々浮き上って来る。自動車に寄り添い、息をひそめて皆川は巨大な光の輪を見送った。たった今照し出しそこねた彼に気づいて今にもその輪が急転し自分を捉えに戻って来そうな気がしてならぬ。

皆川は手元の時計を見、その光が弧を描ききりもう一度元へ戻って来るまでの時間を計った。間隔は六分あった。

後の扉を開け、固く、閉められている座席の上側を金具を使ってこじ上げはがし、下に収われた爆薬を取り出す。時限装置がつけられ、圧縮された強力な爆発力を持つ爆薬は、見かけよりもはるかに重かった。

船尾の舵の基部に仕かけて船底に穴を開ける爆弾はそれだけで四十キロある。加えて二つ。船を停めた舫いを断つ爆薬が二個。

舫いを外された輸送船は、丁度時刻の強い上げ潮に乗って岸壁を水路に向って離れ、五分後に船尾の船底を爆裂し半時間後には水路の中央近くで座礁する手筈だった。

合わせて六十キロに近い三個の爆弾を約一粁離れた目的物までどうやって運ぶかだ。

船は無い。勿論担いでは泳げない。方法は、港湾一杯に漂い流れる種々の残骸物にまぎれ、筏を組むか、何か大きな浮游物に載せ、上げ潮に乗って運ぶよりなかった。

その手筈のための、ロープも用意してある。

この期に及んで慌てはしなかった。打ち合わせは細心にくり返し、これから先にすべき手順もすべて知り尽している。

闇の中で更に眼を閉じれば、今かかえている爆薬の重み、感触と同

じように、泳ぎつき、それをしかける船の吃水間近の錆びて荒い鉄板の感触さえ予感することが出来た。

すべきことについてはすでに知り尽していた。

ただ、潜めて運んで来た爆薬をかかえて下ろす瞬間、皆川には改めて、今こうしてここにいる自分自身が不思議な感慨のうちに感じ直されるのだった。

この数日間の激しい戦闘の中で、くり返して来たあの自問に向って今また彼も同じように答えようとしていた。

〃――何であれ、俺が自らの内で許して選んだことがらについて、もう一度それを自ら証したいと願ったことを、或いは今、俺はこうしてかなえようとしているのではないのか〃

爆薬は、腕に重かった。石畳の上へそれを下ろしきった後、皆川は考えた挙句着ていて邪魔になる上着を車の中に置かず、岸壁から水の中へ捨てた。

迫って来る探照燈の間隔を計りながら二度に分けて爆薬を埠頭の岸壁まで運んだ。どんな装置がほどこされているのか知らぬが、抱いたものをつまずいて落しでもしたら或いはそれきりかも知れぬ。

水際に爆薬を置いた後、暗い水際を這うようにして適当な浮游物を捜した。東側の岸壁から北側の陸に戻って少しいくと破壊された海軍司令部の前の連絡内火艇用の小さな浮桟橋の残骸が見えた。小さいとはいえ、桟橋ごとは到底動かせはしないが、その先端の部分が角から三角に千切れかかっている。

車に置いた金鋸を取って戻ると、半ば沈んだ桟橋にまたがり、木部の枠を外側からしめているワイヤを水中で切った。

解き放された部分を、水に入り岸壁に添って押して戻る。切断の作業に汗ばんだ体に、水は思いがけず冷たく心持良かった。

不安定な桟橋の残骸は、それでもどうにか六十キロの荷を載せて片側で支えれば引っくり覆らずにすみそうだ。

退いている潮に、水面から高さの出た岸壁の上から重い荷を一人で一個ずつ下ろし、揺れて不安定な筏の上に縛りつける作業は思いがけず時間を食った。

一つがやっとすみ次にかかりかけた頃、周期を置いた探照燈の明りがやって来る。積み終った荷を他の材木の破片で隠して明りの過ぎるのを筏の蔭で息をひそめて待つ。

もし、監視兵が離れた岸壁にたどりついている浮游物に疑念を持ち、試しに弾を浴びせ、その一発でもが爆薬に命中すれば万事終りだった。

巨大な光の輪がかかり、やがて外れて過ぎるまでの時間がひどく長いものに感じられる。数万燭光の明りは、筏の蔭にぶら下る皆川の体の影を大きく水中の埠頭の壁に照し出した。

三個の爆薬を筏へ下ろして縛りつける作業で、材木の折れ口や、貝の付いた岸壁の岩肌で手から胸、肩にかけて何カ所も切った。爆薬を積み終った時、潮がしみ、水の中になお血の流れている傷口を彼はくわえて吸った。傷口は潮辛く、熱かった。

その瞬間、彼は何故かふと今計り知れぬ安息のうちにある自分を感じたのだ。しみじみした安息と、そして満足さえあった。

それは、不安定な筏へようやく重い爆薬の積み込みを仕終えたという安息や満足では決してなかった。それならば、その後に残された更に困難な危険な作業について思う筈だった。

それはなんと言おう、はるか遠く幼なかった日、期待をこめた明日の行楽に、前夜その荷作り準備を仕終えて睡りにつこうとした時の子供の心のそれに似た安息と満足、そして期待だった。

幼い日のあの時の、落ちかける睡りのうちになお手を延べ枕元の小さなザックに触れながら感じた、おぼろげな意識のうち故になお生々しい、明日の幸福への予感と、その戦慄を味うべく今確かにこうして存在している自身への自覚、その存在感への安息に等しかった。

趣(おもむ)こうとしている危険を前に、自分が感じている幸福への予感と戦

慄に、それを感じ味おうとしながらも皆川は戸惑った。
その予感の故を知らないのだ。
彼はそれを、自身の不敵さと思おうとした。しかし、全身は緊張していた。
故の知れぬまま、彼は自分をその戦慄に向って解き放ち、許した。それを詮索する暇はもう無いのだ。

次の探照燈の旋回をやり過ごし、岸壁を蹴った。上げかけの潮は決して早くは筏を運びはしない。それでも潮の流れを信じて、筏を押しながら水を蹴った。
筏を整える作業で熱している体温がさまされ、それに従って水の冷たさが身にしみ出す。興奮は醒め、冷えていく体とともに緊張ばかりがましていく。
六分の間隔を置いて探照燈は水面を照して過ぎる。外れて過ぎた明りはやがて眼の前に彼の向うものを照し出す。
闇の中から突然に照し出される四千頓の輸送船は巨大に、すぐ間近に見えた。そして明りの過ぎた後、闇の中に目的はまた不可能な遠さで感じられた。
重い荷物を縛って、不安定な筏の行程ははかどらなかった。
何度、照し出されて浮ぶゾエラ号を眺めただろう。その度に、彼女は段々遠く小さく隔たって感じられた。
明りの輪が外れて過ぎ、また水の上に闇が戻る度、発見の危険を忘れて皆川は明りが一時も早く自分を照し出し、そして船を照し出すのを願った。
行方は遠く長かった。きりなく水を蹴る動作にも、体が冷え手足の力が萎えていくのが感じられる。
おびえはしなかったが、彼はとにかく急ごうとしていた。
そんな自分を抑えるように、岩壁を離れる前感じていたものについて想おうと努めた。

あの時感じていた予感は、果して今現実に満たされようとしているのか。
それを確かめるように皆川は水を掻き、足を蹴った。
その時、彼は感じたのだ。冷えきり、萎えていこうとする五体の中になお、先刻あの岩壁で味ったものはあった。
自分に問いかけながら水を蹴る時、力を奮い手足を疲れさせようとする重いその動作のうちに、彼は今また確かにあの予感と戦慄を感じることが出来たのだ。
〝俺は今、こうして自分に証そうとしている——。
何を——。
俺がこの町に残り、闘いの最中にいること、俺が今、こうしてこの運河を思いもかけぬ目的のために泳いでいくこと、それが結局、ファリダ、俺が自身の内に問いつめたお前への愛のためだということを、俺は今、俺に、そしてお前に向って証そうとしているのではないか——。
俺がこのボートサイドに残り、あの銃を把って射ち、今爆薬をかかえて船を沈めにこの水の中を渡っていくのは、お前たちが叫ぶように、或いは俺の方がお前たち以上に間近で触れてまで知っている、あの巨きな熱い手の、巨きな鼻の、巨きな眼の、あの巨きな男のためにでは決してない。誰のためでもない、ファリダ、これはただお前のためになのだ——。
ああ、ファリダ、お前はそれを知っているのか。出発の別れに俺がすべきだったのは、接吻や、抱擁や、或いはようやく俺たち二人の仲を、同じ血を持った仲間同士のそれのように認めて俺との未来を約束した仲間の儀式などではない。ただひとつ、俺がこうしてお前を離れて出発していくのは、結局誰でもないただお前一人のためにだということを、今たった今俺がこの水の中で覚ったように、もっと、もっと、もっとお前に覚らせることだった。
いや、或いは、俺が知る以上に、お前はそれを知っていてくれるだろうか——。ああ、ファリダ、俺は今、たった今、お前の接吻を、お

前の乳房を、お前のすべてを、今までのいつ以上に、この俺一人の、俺自身のものとして感じることが出来る。そんな気がするのだ、ファリダ――〃

筏を過ぎ、前方を照す光の輪は、何度目かにまた向いの埠頭に舫われた船を浮き上がらせた。

だが、その一瞬、皆川は輝くその光の輪の内に、ファリダを見た。白く浮き上る船の姿態は彼女の映像だった。

必死に水を蹴り、彼が向い到りつくそうとしているものは、ファリダだった。過ぎていく光の輪の内から、その映像が消え闇が戻った時、皆川は体をひたす冷たい水の中で彼女を感じたのだ。

水に冷えきっていく肌の上に、それは熱く生々しい感触で感じられて在った。水を掻く腕の内一杯に彼はその感触を抱きしめた。

なお確かにそれを確かめ我がものとするために彼は水を蹴った。ファリダは今、そこに在った。肌を包んで冷やしていく水の内一杯に溢れて彼女は感じられた。彼は今、彼女に押し包まれて在る自分を酔ったように感じつづけた。

それを喪うまいとするようになお一層彼女に到りつくそうとするように、皆川は水を掻き、足を蹴りつづけた。

彼の眼の前に、彼の知るファリダの総ての映像が重なって在った。水を掻くその腕の内に、彼女のすべての感触があった。体に添って過ぎる僅かな水の流れの内に、彼女の全身の熱いひずみをさえ彼は感じることが出来た。今捉えようとしている幸福への予感ではなくその感触への現実の戦慄が、体の一番奥底から、今、全身に走ろうとするのを彼は感じていた。

東　京

「どうしたの。何を考えているの」

仰向いたまま美奈子は言った。

「何も。何を考えることがある」

「そうね」

素直に、そして微笑を感じさせるように彼女は言った。

見なくとも彼には彼女の微笑の表情がわかった。

それについて彼が問えば、彼女も、「何も」と答えるだろう。〃しかし何故女は、この女は、このことの後で微笑するのだ。何故とは言わなくとも、何に向っての微笑なのだ〃

また暫くし、

「ねえ、何を考えているの」

彼女は訊ねる。その声はただ、歌のくり返し（ルフラン）のように聞こえた。

彼は答えずにいた。

今、この今、何を問いかけ、何を答えることで、あのことの中とは別の、何が互いに伝わり合い、何がいき交（か）うと言うのだろうか。

何も考えてはいない。全く、何も。彼はただ溺れている、溺れる、というより今きりなく、ゆるやかに下降していく自分だけを感じる。それはひどくゆるやかだが一種の失速感に似ていた。その限り、その感覚の内で彼は一人きりだった。

落ちながら彼は自分を支えようとはしない。どれほど前からなのだろうか、いやはるかずっと以前から、彼は失速し、落ちつづけている。

それを支えようとすることが、何かを考えることなのだろうか。

しかし彼は考えなかった。

このゆるやかな失速の内に、淡くゆるやかに、しかし何もかもが消え喪（う）せていこうとしているように感じられる。そう思う彼自身すらがいつかは完全に。

急激な失速には、それが墜ちきった瞬間の衝撃があるだろう。しかし彼が感じていると思う、この失速の底には何も無いように思われた。長いゆるやかな失速の途中に、流れる途中で燃えつきて消える星のように、何もかもが溶けて喪われていくような――。

美奈子はまた問いかけるように、今度は仰向いていた顔を逸らし体を変えようとする。
彼はそれを拒むように体を離した。触れ合っていた肌が離れると、かえって逆に、彼は自分以外に在るものについて意識する。
彼が感じていたゆるやかな失速は中断され、代りに彼は今まで実際に自分と共に、自分にとって在ったものについて思わなくてはならぬ。
彼女の内に入り、彼女と一緒に在った時、彼は共に在りはしてもそのものについて思いはしなかった。
今、彼は彼女の外側にいた。
今と、先刻と、二人の間に置かれた距離は、どう違うのだろうか。いや、その距離とは、どんな距離なのか。
彼はそれを感じるようで、感じない。そしてまた、感じないようで、感じるのだ。
〝俺は今、この女を抱いてはいない。彼女の内にはいない。しかし俺は今でもこの女の中にいる。この女の中にしかいないのではないか〟
そして同時に、
〝この女は果してここにいるのか。俺にとってこの女はどこに在るというのか。重なり合い、或いは間近に離れていながら、俺はこの女に本当にとどいているのか――〟
彼は思った。
体の離れた彼を追うように美奈子は体を寄せて来る。たった今まで、シャムの双生児のように繋がる部分が一つに溶け合い、更にその上もっと多くの相手の部分を自身のものにしようとむさぼり合い重なり合って来た時間がまだ足りぬというように、彼女は仰向いたままの彼の肩を抱いた。
下側の乳房が腕に押しつけられ、上側の乳首が、不安に宙にとまっている乳房の重みを感じさせながら肩口に触れていた。
肩へかけた手に美奈子はそれ以上何の力も入れようとはしない。それはただ、二人が今もまだその部分で触れ合い、繋っているということを証すためだけのように、ぬくもりとかすかな重みをかけて彼の肩の上に止っていた。
彼はそれについて殆ど感じはしなかった。むしろ、彼にとって肩口にかすかに触れている乳首と、その先に伝わり来る乳房の重みの方が多くのものを感じさせた。
今までのことがようやく終ったこの瞬間を除けば、乳首のその感触は、彼にとって体の内に強い電流を伝わらす押し釦ともなった。
そして今、つい今しがたまで自分をその電流の痙攣にまかせた押し釦の感触は、彼が今までその腕にし得て来たものについての問近い追想を育てた。
気だるい四肢を延べながら今彼が怖れるものは、その追想がやがてまた同じ痙攣を彼に伝えることだけだったかも知れない。
そして、美奈子は、或いはすでにそれを知っているかも知れぬ。彼の肩に腕をかけたまま、彼女は体ごとでその押し釦を彼に向って誘うように置き直した。
二人は互いを計り合うように黙ったままでいた。まるで今まで交されていたことが互いの間の闘いであって、今一息ついて更に、相手の息の根にとどめをさすべき闘いの機会を窺い合う同士のように。
彼は間近に自分を見つめる美奈子の眼ざしを感じる。今しがた、彼女が問うたものが、彼女が再び始めようとするその闘いへの窺いであったことを彼は感じる。
彼はもう一度、つい今しがたまでの自分たちをふり返って見る。
今しがた彼女は何度声を上げたろうか。彼女は何度満足しただろうか。頭の内で指を折ってみる。そして手を延べ彼は確かめた。
ベッドの部分は濡れていた。そこだけ異端に冷やかな感触があった。そして彼女はそれを無視して避けるようにその部分からは体を引いて横たわっていた。
確かめるように彼はその上に手を置いてみる。それをもたらしたも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com